

1. はじめに

○目的 我々は、可視的な行為を通して、「彼は親切だ」のような属性判断を行うことが少なくない。行為の観察から属性判断にいたる要因について考え、日本語と中国語の相違の一側面をみる。

菅さやか・唐沢穰「人物の属性表現に関する「具体」と「抽象」—社会心理学的見地から—」（中川・定延編『言語に現れた世間と世界』所収くろしお11月6日出版予定）

われわれは、他者の行為を観察した場合に、その行為から人物の傾性(disposition)¹を推論することがある(Ross, 1977)。しかし、その推論の程度は様々であり、行為者に対してどの程度の傾性推論が行われたかを知るためには、言語表現が有用な手がかりの一つとなる。(1頁)

人物に対する傾性推論に影響を与える要因として、集団間葛藤が存在する状況や、行為者に対する既存の「期待」(expectancy)²を挙げ、さらにそれが人物の属性表現に及ぼす影響について議論する。加えて、文化によって異なる傾性推論の特徴について議論する。そこでは、言語表現が傾性推論や記憶に及ぼす影響について述べ、さらには、それぞれの文化における傾性推論の特徴が、どのように出現するのかという点について論じる。

そして、対人認知と言語表現の関係についてのまとめを行ない、言語表現が社会に蔓延して消えることのないステレオタイプ³の維持に強く関与している可能性を示唆し、最後に今後の研究の発展性について述べる。(2-3頁)

このような現象(中川注:身内臆戻)をMaassらは、「言語的集団間バイアス」(Linguistic Intergroup Bias, 略称LIB; Maass, et al., 1989)と名付けた。この現象は我々の身近な所でもよく見られる。例えば、自分の所属する集団と敵対関係にある集団の人物が、誰かにぶつかったのを見たときとしよう。それを見ただけで「あいつは、乱暴だ」とか「態度が悪い」などと言うことがあるだろう。それに対し、自分と同じ集団の人物が同じように誰かにぶつかった時は「肩が当たった」とか「ぶつかったけど、大丈夫かな」などと言い、その行為をネガティブな特性と関連付けて表現することは避けられやすい。(6頁)

¹社会心理学では一般的に人物の特性を表す際に「傾性(disposition)」という用語を用いる。本章では、傾性を表す言語表現について記述するときのみ、言語学で一般的に用いられている「属性表現」という用語を採用する。それ以外の点に関しては全て「傾性」と記述する。

²心理学で用いられる「expectancy」は、「期待」または「予期」と訳され、「hope」のように望ましい事象に関するものだけでなく、中立的な意味合いにおいても使用される概念である。個人に対する期待や特定の集団に対する期待などさまざまなものがある。

³ステレオタイプとは、既存の期待の一種であり、特定の集団やその成員の傾性や行動特徴に対する固定化された信念のことを言う。

LEB (中川注:「言語期待バイアス」Linguistic Expectancy Bias)は、集団間葛藤が存在しない状況であっても、ステレオタイプや、行為者個人に対する既存の期待が存在すれば、その結果として生じやすい。例えば、女性に対して「感情的だ」というステレオタイプを抱いている人は、女性が泣いているのを見たときに「彼女は感情的だ」と言うだろう。これは、女性という社会的カテゴリー全般に対する既存の期待を、成員である個人の特性として一般化していると言える。(7-8頁)

実際、Wigboldus, Semin, & Spears(2000)は、情報の受け手がターゲット人物に関する具体的な記述を受け取った場合は、その人物をとりまく状況に関する理解が促されるのに対し、抽象的な表現を用いた記述を受け取った場合には、人物の傾性理解の方が促進されることを示した。すなわち、人物に関する理解を容易にするためには、形容詞のような抽象的な言語表現で情報を受け取った方が有効であると考えられる。

しかし、最近の研究によって、言語表現が人物理解や傾性推論に与える影響は「文化」によって異なることが明らかにされている。例えば、Maass, Karasawa, Politi, & Suga (2006)の実験では、形容詞を用いて書かれた人物情報と、動詞を用いた情報が同数含まれた文章を、日本人およびイタリア人大学生に呈示し、記憶再生を求めた。すると、誤再生の内容において興味深い違いが見出された。西欧言語圏(イタリア)の参加者は、動詞で呈示されていた情報を、形容詞を用いて記述する傾向が顕著であったのに対し、東アジア言語圏(日本)の参加者は、逆に形容詞で与えられていた刺激情報を動詞表現で再生する者の方が多かったのである(Maass, et al. 2006 実験3・4)。(11頁)

このような記憶のゆがみと推論の方向性の違いは、それぞれの文化の思考様式の違いに基づいていると考えられる。西欧人は、行為の主体に注意を向ける傾向のある「分析的思考」(analytic thinking)の傾向が強いため、人物の「本質」(essence)を最もよく表す傾性を推論することによって、人物を理解していると考えられる。これに対し東アジア文化圏では、文脈により多くの注意を向ける「全体的思考」(holistic thinking)の傾向が強いため、与えられた属性表現から具体的な行為や状況を思い浮かべることで、人物に関する理解をより明確なものにしているという可能性が考えられる(Nisbett, Peng, Choi, & Norenzayan, 2001)。(11頁)

2. 行為から属性へ

ここでは「接近する⇒近接した、謙遜する⇒謙虚な」のような『ある行為に直結する属性』に限定にする。厳密な区別は困難であるが、「渡米する⇒太る」のように、ある状態の原因がある行為を起因とするということは多く見られるがここでは除外する。

類似した事態を表す場合でも「孤立した・独立した・孤独な・単独の」のような品詞の違いは無視する。ただし「謙遜する(一回的行為)⇒謙虚だ(属性)」は本発表の主たる関心事である。

一般的には「行為」が「属性」に至る道筋としては次のようなプロセスが想定される。

一回的行為⇒経常的行為・習慣的行為⇒属性

もちろん「(秘密を) 軽々しくしゃべる⇒口が軽い」に対して「口が堅い」は対応する行為が想定しにくいといった問題はある。

日本語の「早起きだ」は「彼はいつも早起きだ」のように時間表現と共起できるので「属性」には至っておらず、せいぜいが「習慣」であると考えられる。それに対して「飲みだ」は「*彼はいつも酒飲みだ」と言えないことから属性表現であると考えられる。

なおここでいう属性とは、益岡隆志氏の言う「履歴所有属性」と「カテゴリー属性」のいずれをも含む。属性の下位区分としては、「生得的属性：獲得属性，偶有的属性：非偶有的属性，可視的属性：内在的属性」などがあるが，その中で「偶有的属性」は「彼はいつも元気だ」のように時間詞と共起したり，「彼は北京で人気がある」のように場所詞とも共起するものがあるなど，本発表の議論と関わるものがあるが深入りしない。

3. 日本語には形容詞が少ないのか？

省略

4. 中国語の“得”補語

小野秀樹「“得”補語が表す「可能」の意味」『中国語』1993年6月大修館

(1) 他说得大家笑起来了。

(2) 观众看表演都看得满意极了。

・しかし、杉村 1976 に指摘されるように，動詞を反復した「(S) VOV得C」の形が，CがOを叙述対象とする場合，S（主語）の経常的性質を表す傾向がある。

(3) 老鼠挖洞挖得很深。(ねずみは穴を深く掘るものだ)

(4) 他说法语说得很好。(彼はフランス語がうまい)

「程度副詞+形容詞」の場合。(6)のように特定の文脈に入れば一回性の事態を表すが、そうでなければ一般的に経常的性質を表す。

(5) 这场友谊比赛非常精彩，运动员都打得很好。

朱 1956 は、Cが単独の形容詞である(甲式)と「V得C」は、その表す意味が「恒久的、不変的な状態」であるという。

(6) 他睡得晚。

(7) 他工作干得出色，所以我们没有把住处当作问题。

また朱は甲式の様態補語は比較・対比の意味合いをもつため、二つの事態を対比させていうとする。

(8) 这张相片照得好，洗得不好。

(9) 我从前唱得好，现在嗓子不行了，唱不好了。

(10) 他唱了一只歌，唱得非常好。

(11) 小床上睡着儿子牛牛， 牛牛睡得很沉。

(12) 站得高，看得远。

◎小野はCがVに伴って常に出現すること、つまり「VにCが常に伴う状況の認知」、それに「Cの非描写性」、「V得の aspek トに関する中立性」、「動作主の意図の希薄性」が可能補語と様態補語接近が背後にあるとする。日本語の「ここから富士山が見える」でも様態か可能か判然としないという類似した現象が見られるが、ここでは中国語の“得”補語がせいぜい、経常的行為、習慣を表すものであって属性を表すことが本務ではないことを確認しておきたい。

さらに“得”補語が属性を表すと想定しうる数少ない事象の中に「可能補語」と呼ばれる「可能」があること、さらにいえば可能しかないことは注目してよい。それも小野のように様態保護との接近、あるいは木村のように「Cが裸形容詞からなる場合のV得Cは、可能は可能でも、一AカテゴリーからAカテゴリーへの<変化>が動作結果として実現するかかどうかという意味での可能を表す形式」(木村英樹)

杉村博文 1976 「<他念书念得很熟>について」『中国語学』223号

杉村博文 1982 「中国語における動詞の承前形式」『日本語と中国語の対照研究』6

5. 経常的行為から属性へ

ここで言う属性とは、たとえばアインシュタインに面と向って「アホやな」というような擬似属性貼付は除外する。日本語では「彼は結婚した」という行為表現が「彼は既婚者だ」という所属カテゴリーの変更を含意するが、中国語はその点が必ずしも明確でない。(杉村「先“了”，后“的”，木村」)。“起得早”や「早起き」だがせいぜい経常的行為・習慣にとどまるのに対して日本語では次のように対比にすれば『働き者だ，努力家だ』といった「有意義な属性(益岡)」が含意されるが、中国語はなお行為の表現にとどまるようだ。(日本語が事実を言うよりも評価を言う言語という側面(澤田浩子))

(13) 他 起得早 睡得晚。 彼は朝早く起き，夜は遅くまで起きている。

同様に。

(14) 他 喝酒。 <彼は酒を飲む。>

(15) 他 喝酒，抽烟。 <彼は酒は飲むし、タバコを吸う。>

They smoke thou

益岡 1987 は以下のペアを紹介している。

(17) a. この論文はチョムスキーに数回引用された。

b.*この論文はチョムスキーに数回読まれた。

(18) a. このメーカーのバットは，王選手に何度も使用された。

b.*このメーカーのコーヒーは，王選手に何度も飲まれた。

そして次のような指摘をする（190頁）。

これらの文においては、「この論文」と「このメーカーのバット」に関して、それぞれ「チョムスキーに数回引用された」、「王選手に何度も使用された」という出来事の記述によって、「重要な論文である」とか「優れたバットである」といったような、有意義な属性が含意されるのである。

益岡隆志 1987『命題の文法—日本語文法序説—』くろしお出版

6. 行為から属性へ——結び——

何回目で「いつも」が成立し、何回目で属性化するか。ケースにより非常に違いがある。

- ① 無駄な努力 ex. 「脚痩せ体操」、痕跡を残さぬ行為
- ② 固定観念の修正（中川くんは中国語が下手だ）。
- ③ 評価されにくい変化（中川くんは最近人格が円満になってきた）。
- ④ 時間にルースだ、酒乱だ、嘘つきだ。
- ⑤ 痴漢行為⇒烙印。

(19) 中川は下品な（アホな）ことを言う⇒中川は下品（アホだ）だ。

(20) *中川は上品な（賢い）ことを言う⇒中川は上品だ（賢い）。

「上品」や「賢い」は行為で表せない。「お上品」にしてもメッキはすぐ剥げる。

結論：我々は悪口が大好きであり、人間はそもそも下品である。

日本語の「嘘つき、酒飲み、面食い、女たらし、寒がり、汗かき、；しきり、ええかつこしい、自慢しい、真似しい、うれし、ゲラ（*ニコ）、しゃべり」のように行為と直結する形でカテゴリーを作る属性表現を豊富に持つが、いずれも悪い意味である。笑いかたの「ニコニコ」と「ゲラゲラ」を比べても「ゲラ」はカテゴリーをつくるのに「ニコ」はつくらない。

- ・「泣きい」や「真似しい」など、このてのかたちの多くは関西弁に豊富で、共通語では生産性が低い。
- ・「～がり」形は生産性が高い。「人に物をあげる」ことは決して悪い行為ではないが「あげたがる」はよくない。